

2015 年度秋学期 授業アンケート「教員コメント」の「FD委員会総括」

FD 委員会

<座学>

1. 全般に、各教員とも学生の基礎知識のレベルの把握に努め、かつ学生間の基礎知識のばらつきに配慮しながら、授業改善に努めていることがわかりました。特に、8割から9割の学生が「満足」「ほぼ満足」と回答している授業科目では、空欄を設けたレジュメ作成やパワーポイント資料等の配布物の見直し、また学生の理解や興味を促す新聞記事やDVDなどの補足教材を授業構成に積極的に組み込んでおられました。
2. 講義形式という制約の中で、学生の主体的な参加や学びを引き出す教育・指導方法の工夫も目立ちました。講義内容をテーマに毎回、学生同士のディスカッションの時間を設ける、講義の合間に学生との意見交換を交える、学生自身が講義をまとめる力をつける目的から板書形式での講義進行を行う、リアクションペーパーの導入による理解度の確認、学生の理解度に合わせた小テストの実施、50人以下の授業ではグループワークや発表など、そのレポートリーは多岐にわたるものでした。
3. さまざまな工夫により「予習・復習を十分した」「復習を十分した」「予習を十分した」という回答が半数近くを占める授業もありました。
4. 授業内容を「毎年見直している」、「アンケートで学生の要望を聞いている」など、本学教員全般に見られるより良い授業を提供しようという姿勢は、教養、必修、専門科目に共通して見られました。
5. 受講者の多い教養科目を中心に学生の私語の問題に、教員は頭を痛めている様子が見えがえす。魅力的な講義づくりを問題とする前に、学生の私語や遅刻等といった劣悪でマナーをわきまえない受講態度については個々の教員の努力を超えたところもあるようです。
6. 予習復習などの学習の努力や、講義中の積極的な学びの姿勢もないままに、教員に対して一方的に「わかりやすさ」「おもしろさ」「あるべきイメージ」を求めてくる学生の評価に対してとまどう声もありました。
7. 毎回のことですが、空調設備、授業設備の問題が挙げられており、教員・学生・事務との間で改善のためのコミュニケーションが必要であると思われます。

<演習・実習系科目>

1. 全体的に、いずれの科目でも学生から良好な評価を受けておられるようでした。演習科目では学生との距離が近いと、モチベーションを高めておられる先生方が多いようです。他方で、近すぎる距離が学生の自由な記述を妨げている可能性を指摘するコメントもみられました。
2. 合宿等のゼミ活動については学生の意欲付けに繋がっており、今後さらに充実させてゆきたいとのコメントがいくつか寄せられていました。
3. 基礎演習については、学生からの評価は高いというコメントが多い半面、テキストの難易度やアカデミックリテラシーや発展演習との連続性といった点について、検討課題としてほしいとのコメントもありました。
4. 専門演習については、学生の積極的な参加がみられるようになってきたとするコメントが多くありました。他方で、議論が長引くことによって終了時刻が遅くなることを問題視する学生の意見も出ており、1クラス当たりの学生数の調整等が必要であるとのコメントもありました。また、専門演習Ⅱについては、就職活動とのバランスの難しさにつ

いての記述が目立ちました。特に就活の長期化にともなう指導に対する影響を気にする声が多くありました。

<語学>

1. 全体的に、いずれの言語でも学生の授業満足度が高いようです。授業の目的にあわせた教材選択や、学生の興味を引くような題材選択などの成果であろうと思われます。そうしたこともあり、アンケートの評価、コメントに対して満足されている先生方が多いようでした。
2. 英語については、学生の予習に関して良好であるとするコメントが多く見られました。復習については、全体的に今後の課題としてあげておられる先生が多いようでした。
3. 難易度に関しては、言語の種類に関わらず、苦慮を重ねながら対応されている先生方が多いようです。学生間の習熟度格差に対しては、説明や質問の時間を十分にとるなどの対応策がとられていました。
4. 学生から同じ科目であるのに評価基準がクラスごとに一律でないという意見がよせられ、担当講師のみでの解決が難しく困惑しているとのコメントもありました。

<総括>

1. 上記の各領域での教員コメントのまとめに反映しているように、本学の教員のみなさんが、専任、非常勤を問わず、それぞれの授業の教育の質、学生の理解を高めるために、日ごろから熱心に授業改善に取り組んでおられる様子が伺えました。また、その取り組みは教員それぞれの個性を反映したもので、さまざまな創意工夫がみられました。
2. 教員と学生の距離を近くとりつつも、なれ合うことなく、優しく、かつ厳しく指導しようという姿勢がさまざまなコメントの中に見て取れます。このような関わり合い方は、本学のような比較的規模の小さい大学においてのみ可能であり、本学の将来にとっても重要な点であると思われます。
3. 授業を一方的な知識の受け渡しの場ではなく、教えるものと教わるものが関わり合いながら互いに学ぶ場であるという考えにもとづいて、教員、学生相互のコミュニケーションをはかりながら学生の理解を促進させる工夫が、いろいろな授業でなされていました。
4. 学生気質の変容、相対的な学力の低下などに戸惑いながらも、これらの問題に対処するための工夫を行っておられる様子が見て取れました。今後、こうした学生の問題は悪化することはあっても著しく改善することはないかと思われます。常にこうした問題に対応できるように備えておく必要があるようです。
5. 本学の卒業生は、就職活動の際にも、就職後も、社会から常に高い評価を受けておりますが、その評価のもとにあるものは、教員の皆さまの教育力の高さ、教育に対する真摯な姿勢にあるのだということが、今回のコメントからも確信できました。本学は、教育に時間と労力を惜しまないこうした教員の皆さまのおかげで成り立っています。その全ての方々に FD 委員会は感謝申し上げます。今後とも引き続き、学生のためのご尽力をお願いいたします。